

彩の歳時記

平成二十三年 九月

くさかえ い え はちす
日下江の入り江の蓮 花蓮

み さか ひと とも
身の盛り人 羨しきろかも

古事記

「日下江の入江の蓮の美しい花もように、盛りの年齢にある人がうらやましいものです」

『万葉集』に歌われた植物を「**万葉植物**」と呼びますが、「**蓮**」もその一つです。明治の遊び歌「**ひぐらいた ひぐらいた なんの花がひぐらいた。れんげの花が ひぐらいた**」に歌われているのが**蓮華(れんげ)**、すなわち**ハスの花**。古代には、花のあとの「**花托**」が**蜂の巣**に似ていることから「**はちす**」と呼ばれました。

花のあと、中心部にある花托が成長し、緑から茶褐色の「**果托**」になり、蜂の巣状の穴で実が熟します。冬枯れの蓮は『**衰荷(すいか)**』と呼ばれ、趣があり、絵にも描かれます。

草花や生物には、盛りの花だけでなく、それぞれに趣があるものです。



九月の異称

ながつき ながつき
長月 夜長月の略。夜がだんだん長くなる月。

今来むと言ひしばかりに長月(ながつき)の有明(ありあけ)の月を待ち出でつるかな

古今集

「いますぐ参ります」と言うので九月の夜長をひたすら待っていたら夜明けに出る有明の月ができてしまいました。

九月の暦

一日 防災の日 1923(大正十二年)のこの日、午前十一時五十八分、関東大震災が発生。Mw7.9。

死傷者二十万人以上。それから八十八年の時を経て、日本観測史上最大のMw9.0を記録した東日本大震災が発生、死者行方不明者二十万人以上。それに派生して起きた福島原子力発電所の水素爆発は、人的要因も重なり「国際原子力事象評価レベル7(深刻な事故)」に指定された。今、改めて原子力発電の危うさに気付かされ、原発に異議を唱える声も増えつつある。

八日 白露【二十四節気】大気が冷え霜がで始める頃。



九日 重陽の節供(菊の節供) 節供の名には**春の桃・初夏の菖蒲・秋の菊**と季節を代表する花が配されているが他の節供に比べ、行事は少ない。大正初めの第一回大会以来、毎年、東京・日比谷公園で開催されている「**東京都観光菊花大会**」(二月一日)は、**菊の祭典**として賑う。

十二日 十五夜 旧暦八月十五日の月を中秋の名月・芋名月などと呼び、月見の宴を催す宮廷行事は中国伝来のものだが、単に月を愛でる慣習は縄文時代からあった。現在では余り盛んではない。

十九日 子規忌 正岡子規【1867～1902】の忌日。愛媛県松山市生まれ。俳誌「ホトトギス」を創刊



明治三十一年(1898)に「歌よみに与ふる書」を著し、短歌革新に着手し、根岸短歌会を主宰。門下に高浜虚子、伊藤左千夫らがいる。現代俳句・短歌の先駆者的存在。晩年は台東区根岸に子規庵(現存)し当時の様を窺うことができる(を結び、脊椎カリエスで床にいたまま、旺盛な創作活動を続け弟子たちを育成した。闘病日記に『**仰臥慢録**』。夏目漱石の俳句の師匠でもあった。

絶句「**糸瓜咲て痰のつまりし仏かな**」から**糸瓜(へちま)忌**とも。

十九日 敬老の日【第三月曜日】 老人を敬愛し、長寿を祝う日。

二十三日 秋分の日【二十四節気・秋分】秋彼岸(二十日～二十六日)の中日。

九月の歌 浜辺の歌 詞 林古溪【1875～1947】 曲 成田為三【1893～1945】

戦後、中学校の歌唱教材となった日本歌曲。ゆるやかに流れるようなメロディが情感豊かな歌詞と相まって、現在まで長く愛唱されている。日本を代表する歌の一つとして、外国で演奏されることも多い。二番の詞「もとほる(もとおる)」は「歩き回る、巡る」の意、「星の影」の「影」は光の意味。初出の歌詞は、岩波より1918年に出版。表紙は竹久夢二の画↓



あした浜辺を さまよえば
昔のことぞ 忍ばるる。
風の音よ、雲のさまよ、
寄する波も貝の色も。
ゆうべ浜辺をもとおれば、
昔の人ぞ、忍ばるる。
寄する波よ、返す波よ、
月の色も、星の影も。